立命館アジア太平洋大学　第4回　学長候補者選考委員会議事録

日　時　　　：　2026年2月10日（火）18時00分～19時40分

場　所　　　：　APU本部棟3階　第5会議室（ZOOM接続あり）

委　員　　　：　委員長　淺野 昭人（副学長・常務理事）
委員　　陳 慶昌（アジア太平洋学部 教授）
VYAS Utpal（アジア太平洋学部 准教授）
柳 ボスル（国際経営学部　准教授）
福山 公博（国際経営学部 准教授）
四本 幸夫（サステイナビリティ観光学部 教授）
山根 友美（サステイナビリティ観光学部 准教授）
JUNG Jonghee（言語教育センター 准教授）
鶴原 利泰（教育開発・学修支援センター 准教授）
日野 智志（立命館アジア太平洋大学事務局 次長）
金剛 理恵（アウトリーチ・リサーチ・オフィス 課長補佐）
寺井 俊裕（アウトリーチ・リサーチ・オフィス 課長補佐）
朴 勝優（アカデミック・オフィス 課長補佐）
眞次 純一（校友）
UWINEZA CELINE（校友）
ABDULLAH Junaid（校友）
JHA ASHMI（在校生 特命副学長）
荒牧 順子（APU国内学生後援会）

選考管理委員：　吉川　卓郎（委員長）、ACKARADEJRUANGSRI P.、宮原 久実

事務局　　　：　井上　智香子（立命館アジア太平洋大学事務局　副事務局長）、
藤原　将人（全学企画オフィス　課長）、小鶴　恭子（全学企画オフィス　職員）

※　下線は欠席者
（委員18名、出席者 16名、委員会成立）
（議事録署名人： 鶴原 利泰、日野 智志）

・・・

【議題】
1．第2回委員会および第3回委員会の議事録承認
→承認。

2．公募要項（案）への意見集約結果および事務局修正案について
淺野委員長より、公聴会およびサーベイに寄せられた意見集約結果とその意見を踏まえて事務局が作成した修正案について説明があった。

（陳）　　修正案は、APS教員からの意見を十分に反映しきれていない。
学長に求める資質のところで、これまでAPUでは適格性や学位、国際的な経験などについて多くの議論があったことは承知している。従来の運用を継続し現行の案で進めるという考えもあるがやや弱いと感じる。
基準を引き下げるということは結果として、本学に対して十分な貢献ができない可能性のある人物が学長に就任する確率を高める。そのため、基

準を厳格化した方がよいのではないかと考えている。APU は国際的であり、研究大学になることを目指している。学術界出身者が学長に就任するのであれば学長が複数の学位を有していることは当然の期待であり最低限であると考えている。

（福山）　事務局案でいいのではないかと考えている。APU はユニークでありそれを最大限に活かすためには間口は広めである方が良い。学者や実務経験者を含めてユニークな方に学長に就任していただくことを考えれば、現行案で良いのではないか。また、APU 内部から学長が誕生することは望ましくはあるが内部から誕生すれば良いというわけではないと思っている。APU は変化を求めていき、さらに変化を起こしていく方向で今後も学長選考に臨みたい。

（山根）　ST では、学長はマネジメントだけではなく、リーダーシップを発揮できることが大事であると意見が寄せられた。また、既に委員会でも複数回議論を重ねているため現時点で公募要項に反映できることはないように思われる。選考プロセスを透明化して、APU にとって恥ずかしくない人選をすることが大事だと考えている。

（日野）　大学運営においては教育改革や組織マネジメント、高等教育理論に関する知識に加え、財務・ガバナンスなど幅広い能力が求められている。近年の学術的議論でも、博士号取得の有無だけでなく、総合的なリーダーシップや実務経験、国際的マネジメント、多様な人材を統率する能力が重要視されている。そのため、学長候補の要件として博士号取得を必須としない方針は、選考の間口を広げる観点から評価できる。一方で、大学としての学術的信頼性や対外評価（例：AACSB 取得等）を考えると、博士号に代わる形で教育研究への理解や大学院での実績、アカデミアとの信頼関係をどのような基準で評価するかを慎重に検討する必要がある。
総合すると、博士号必須としない枠組みは望ましいが、その代替となる適切な評価基準を今後しっかり構築していくことが重要である。

（ABDULLAH）　組織の根幹や内部の課題だけを目標に考えるのではなく、APU というブランド自体を世界に発信し、国際的に世界と APU をつなげられる人物が必要である。グローバルな視点を持てる人物であることが望ましいと考えている。時代や世界の変化が既に進んでいる今、新たな戦略や思考法、AI 導入など新しい技術や教育を含む取り組みを行わないのは適切ではない。進歩的な考えを持つ人物が必要である。学術的な背景を持つことは確かに重要だが、ある程度までは、むしろグローバルなリーダーシップと国際的な経験がより重要だと私は考えている。専門的なつながりや世界水準のプロフェッショナルな経験は、APU ブランド全体にとって非常に重要である。特に、創設から 25 年を経た今、私たちはこれまでの実績を踏まえてさらに力を入れる必要がある。

（淺野）　今回も前回同様に一番の論点になったのは「学長候補者に博士号を求めるかどうか」という学位の取り扱いの点であった。本学はグローバルな大学であり、国際認証を受ける観点からも博士号は必要ではないかという意見である。一方で、企業の経営者や国際機関、政府機関で就業される方の場合、特に日本人である場合には、就業の際必ずしも学位が求められていない状況である。そのため、前回は学位の取り扱いについては両方に該当する方法をとることが良いのではないかという到達点であった。どちらがいいということではないので、実際の選考プロセスにおいて両者を比較する中で学位を保持する方の経験が優れている場合や本学の今後の

展開を考えたときに重要だと思われる場合にはそちらの方を選択し、学位はないが社会インパクトを創出する点や社会連携の点で学長として選出することもできる。この選択の余地を残すためにも、今回、原案で進めたいと考えているが委員の皆さんの意見はいかがでしょうか。

（山根）　日本語版の公募要項で IR という表記はおそらく APS の国際関係学分野を指していると思われるので修文した方が良い。

（四本）　集約結果への回答で「新学長への要望として受け止める」という回答が多いが、これは、何もしないということか。

（淺野）　今回は、公募要項（案）に反映させることを目的に意見を集約している。その観点で言えば、新学長への要望として受け止めると記載した項目は公募要項（案）に反映させない。この意見については、我々選考委員が認識した上で今後の選考プロセスで生かしていきたい、そのような形で受け止めたいと考えている。

（四本）　面接などにすべての意見を反映させることは難しくないか。

（淺野）　面接で候補者に尋ねる設問で今回寄せられた意見を加味して質疑することは可能だと考えている。

（陳）　選考委員長の中立性に関して意見が寄せられている。APS 教員は、選考プロセス自体が公平でありできるだけ迅速に遂行することが重要だと考えている。中立性や選考プロセスへの関与についてどう考えているか。

（淺野）　選考委員長は選考委員の一人であり、役割上私が選考委員長を務めていると認識している。

（陳）　そのように APS 教員に回答します。委員長の役割は調整と議論、意思決定を円滑に進めることだと考えている。

（淺野）　前回も今回も忠実に委員会の運営を行っているのでご理解いただきたい。今回も公聴会やサーベイで意見を集約し、集約した意見は時間をかけて丁寧に全件読み込み、選考委員の皆さんの意見をいただくために本日回答案を示している。そしてこの回答案について意見交換を行い、必要な箇所を修文する。委員長として独断で何かを決めていくことは全く考えていない。今後もその姿勢で進めていきたいと考えている。

（眞次）　学長の居住地に関して、当初から別府に移住することを前提とするように明確に記載してはどうか。

（淺野）　当初から明言すべきかどうかについては預からせてほしい。

（JUNG）　今回の事務局案で問題ないと考えている。新学長に対する意見として受け止めるという文言については、真剣に意見を寄せた方々の誤解を招く可能性があるので表現をもう少し丁寧にしてはどうか。

（淺野）　文言の表現について補足する。本日の議論で基本的には今回提案した公募要項で確定し、公募を進めたいと考えている。いくつかの修文は事務局で行う。

３．次回以降のスケジュールについて

淺野委員長より、次回以降の委員会日程について、事務局からメールにて調整する旨を報告した。

（このページは白紙です）